

INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■ 会長より挨拶	1
■ 第47回運営委員会報告	4
■ 第48回運営委員会報告	6
■ 第25回総会報告	7
■ DGD編集委員会より	8
■ 第25回日本発生生物学会大会後記	9
■ 第25回日本発生生物学会大会決算報告	11
■ 大会感想記	12
■ 総会で思ったこと	16
■ 第42回科学講演会	19
■ 研究助成金公募のお知らせ	23
■ 日本学術会議だより	30
■ 会員異動	33
■ 賛助会員	39
■ 広告掲載、賛助会員入会のお願い	40

NO. 72

SEPTEMBER 1992

日本発生生物学会

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学 理学部 動物学教室

会 長：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中44
基礎生物学研究所 発生生物学系 形態形成部門
江口吾朗（電話 0564-55-7570）

DGD編集主幹：〒 060 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学理学部動物学教室
片桐千明（電話 011-716-2111 内線 5298）

DGD編集幹事：〒 724 東広島市鏡山1-3-1
広島大学理学部動物学教室
嶋田 拓（電話 0824-22-7111 内線 2824）

事務局：〒 113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部動物学教室
（幹事長） 塩川光一郎（電話 03-3812-2111 内線 4431）
（庶務幹事） 田代 康介（電話 03-3812-2111 内線 4433）
（会計幹事） 浅野 美咲（電話 03-3812-2111 内線 4432）

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込5-16-9
学会センター C21
財団法人 学会事務センター
日本発生物学会担当係（電話 03-5814-5810）

日本発生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（DGD、インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面でお問い合わせ下さい。

DGDの在り方及び科研費審査員の推薦について

会 長 江 口 吾 朗

既にご承知のように、平成5年度から文部省科学研究費補助金の複合領域に『発生物学』の新しい領域が設けられ、科研費の申請が可能となります。このことは、本学会としても非常に喜ばしく、その審査方法につきましては可能な限り公平になされるよう、学会としても充分配慮する必要があります。会長といたしましては、この点に格別な配慮を払い、この問題と本学会の大きな事業でありますDGDの刊行を将来どのようにしていくかの2点につきまして、会員の皆様のご意見を直接伺い、健全な学会運営の糧といたく存じ、会員の皆様にアンケートさせていただきました。

このアンケートの結果は、私が集計いたしましたものをここにご報告いたしますが、DGDの在り方及び科研費審査員候補者の推薦につきましては、この結果を十分に考慮させていただき、運営委員会で慎重にご審議いただきました。その結果、運営委員会報告にございますような結論を出させていただきました。

会員の皆様のご協力に深謝いたしますと共に今後共本学会のよりよく発展にご助力下さいますよう切にお願い申し上げます。

科研費審査委員の推薦方法についての意見

回答者数 (1992年5月23日現在)	201名
記 名	129名
無 記 名	72名

意 見			百分比
1. 会員全員の投票による	記 名	7.3	11.8
	無記名	4.5	
2. 会員の投票により専門委員会を組織し、それにより5～10名の候補者を選び、その中から運営委員会が選出する	記 名	11.2	16.2
	無記名	5.0	
3. 2.の専門委員会が選定した候補者の中から会員全員の投票によって選出する	記 名	15.6	28.4
	無記名	12.8	
4. 運営委員会が選出する（運営委員会が、全会員の中から幾名かの専門委員を選任し、その委員会の提案に基づいて最終的候補者を選定する方法も含まれる）	記 名	30.7	43.6
	無記名	12.9	

5. その他

- 会長の責任において候補者を選定し、運営委員会の議を経て決定する。責任の所在が明確であり、ともすると無責任になりがちな投票によるよりもよい。
- どの方法によっても、40～55歳の層から委員を選出する。
- 運営委員会が選出した複数の候補者について、会員全員の投票により上位何名かを選出する。
- 全員の投票によって何名かの候補者を選出し、その中から運営委員会が選出する。
- 民間人も加えた委員会を構成し、幅広く候補者を選出する。
- 一度審査委員となった人は一定期間（10年間程度）審査委員に選出しないといった制約を設ける必要がある。
- 分野にかたよりが無いよう配慮する。
- 可能な限り審査委員を増員し、幅広く分野をカバーできるようにする。
- 立候補制とし、立候補した研究者から会員全員の投票で選出する。

一般的な意見

- 運営委員会は学会運営のためのものであり、審査という機能を specific に持つことを前提として選ばれたものではない。したがって、運営委員会のみで選出することは、基本的に許されない。また、審査委員は学会員に限らないことを前提としなければならない。
- 審査の基準を明確にすべきである。
- 従来の審査は情実的なものが多い。
- 不採択となった申請については、その理由を明示すべきである。
- 審査委員名を知りうる人と知り得ない人があるのには根本的な問題点がある。公表が許されるのであれば、何らかの方法で公平に審査委員名を公表すべきである。また、審査委員は非公開であるのであれば、審査委員名が絶対にもれないようにすべきである。
- 恵まれた研究機関に集中的に科研費が配分されてきた。研究条件の悪い機関に所属する研究者には優先的に科研費が配分されるよう配慮されるべきである。

DGDについての意見

回答者数（1992年5月23日現在）	201名
記名	129名
無記名	72名

意見

百分比

1. DGDは廃刊してもよい

0

2. 会費を値上げしてでも存続させ発展させるべきである	記 名	15.3	21.4
	無記名	6.1	
3. 会費の値上げをさげ、会員増を図ると共に、基金を積極的に募る	記 名	26.0	37.2
	無記名	11.2	
4. 学会から切り離し、適当な出版者に刊行をゆだねる	記 名	26.0	41.4*
	無記名	15.4	

* 2.3. で努力しやむ得ぬ場合には、4 以外に道はないであろうとの意見が相当数含まれている。

その他DGDを改善する方法として提案された主要な意見

- DGD購読会員と非購読会員に分け、前者の会費を大幅に値上げする（購読会員50,000円、非購読会員10,000円）。
- 編集責任を学会が保持しうる条件付きで出版社にゆだねる。
- 日本で発行されている関連欧文誌を統合し、例えば“EMBO Journal”のような雑誌にする。
- 無料ページ数を減らすか全廃し、有料化する。また、別刷の無料贈与を廃止し別刷代を値上げする。
- 会員を一般会員と学生会員の二種とし、前者の会費を大幅に値上げする（たとえば、一般会員15,000円、学生会員 8,000円）。
- 文部省や企業等に働きかけ資金を獲得する。
- ドル立てを円立てに変更し、活字を小さくするなどして印刷費を節約する。

DGDについての一般的な意見及び要望

- 現在のDGDは大会発表のアブストラクトの掲載もなされておらず、また非会員でも会員と全く同等の条件で投稿できるので、例えば、“Developmental Biology 誌”などと同様な性格の国際雑誌であり、学会機関誌としての意義はなくなっている。
- わが国の研究者も今や国際的な視野で活動しているので、学会が機関誌としてDGDを刊行する意味はなくなっている。
- 遺伝子・分子レベルの研究にかたよらず、古典的な手法による発生研究も幅広く総合的に掲載すべきである。
- 速報（ブリーフ・ノート）を設けて欲しい。
- 発生研究は正しい境界領域の分野なので、可能な限り幅広い分野から編集委員を登用する。
- 現在の編集委員構成はいかにも閉鎖的に過ぎる。現今の発生研究の動向を考え、外国のすぐれた研究者も増員し、より開かれた編集委員構成とし、抜本的に脱皮を図ることが必要である。
- DGDも科研費と同様に研究機関の格差を反映している。先端技術を使っていない研究論

文はよりきびしく審査されリジェクトされがちな傾向がある。

- ・DGDに投稿しさんざん英語をいじられる。このようなことは著者に無用な不快感を与え、投稿意欲を損う。

上記のほか、DGDのレベルを評価し、現状でも充分満足しているとする会員が相当数にのぼる。

第47回運営委員会報告

第47回運営委員会は、1992年5月27日午後4時より、横浜開港記念会館において開催された。

出席者（敬称略）：

江口吾朗（会長）、浅島 誠、天野 實、片桐千明（兼編集主幹）、近藤寿人、塩川光一郎（兼幹事長）、嶋田 拓（兼編集幹事）、中辻憲夫、長浜嘉孝、東中川徹、安増郁夫、山上健次郎、米田満樹（以上運営委員）、田代康介（庶務幹事）、浅野美咲（会計幹事）、田沢栄五郎（会計監査委員）

1. 会長挨拶

2. 報告及び審議事項

1) 庶務報告

- ・1992年4月30日現在の会員数は952名であり、本年1月1日から37名増加した。

正 会 員：781名（+12名）

学生会員：171名（+25名）

（賛助会員：12団体（－1団体））

- ・サーキュラー71号を発行した。

- ・東レ科学振興会及びブレインサイエンス振興財団の研究助成へそれぞれ1名ずつ推薦した（前回運営委員会で報告）が、審査の結果共に不採択であった。

- ・山田科学振興財団の研究助成への応募は2名であったので、学会としてその2名（千葉大学理学部、大日方昂氏及び東京大学理学部、塩川光一郎氏）を並列で推薦した。

3) 会計報告

1991年度決算報告及び1992年度暫定予算案について補足説明がなされ、了承された。

4) 会計監査報告

田沢栄五郎（横浜市立大学文理学部）会計監査委員より1991年度の会計処理は適正であった旨報告された。

5) DGD編集委員会報告

（片桐編集主幹より報告）

- ・投稿数など安定しており、採択から出版までの期間は、3～5箇月と順調に出版されて

いる。

- ・前回運営委員会での決定に基づき第35巻より別刷の無料提供を廃止する。この件は今後サーキュラー及びDGD誌上で会員に知らせる。

(嶋田編集幹事より報告)

- ・第34巻3, 4, 5号の編集及び印刷作業にかかっており発行状況は順調である。
- ・無料別刷部数の半減及び別刷代の値上げにより増収が見込まれる(大学印刷と学会での配分率については編集幹事に一任する)。

6) 学術会議報告

平成5年度から科学研究費において複合領域内に発生生物学が新設されることに伴う審査員の決定方法及び日程について以下の事項が報告された。

- ・動物学会, 植物学会, 発生生物学会より各2名(計6名)を文部省に推薦し, このうち各学会から各1名が審査員に決定される。
- ・推薦日程は, 7月末が締め切りとなる予定である。

7) 科学研究費審査委員の選出方法について

会員からのアンケート結果について会長から報告があり, 選出方法について審議した。その結果, 以下の案を総会で提案することを決定した。

- ・本年度は, まず, 数人の候補者を会長が選定し, その中から運営委員会が決定することにする。
- ・次年度以降については, 候補者の選定と決定を運営委員会が行なうこととし, 本年度末に行なわれる次期運営委員会委員の選挙ではこのような機能を併せもつ委員として選挙するよう会員に周知する。

8) DGD編集主幹について

1993年度まで片桐現編集主幹に任期を延長して依頼することが提案され了承された。

9) DGD編集委員枠の拡大について

DGDへの会員からの意見を取り入れ, さらにDGDの発展のために現行の編集委員枠(12名)を若干名拡大する旨, 編集主幹及び会長から提案された。審議した結果, 了承され, これに伴う会則(付則5条)の変更を含めて総会に提案することとした。

10) ISDBとの提携について

ISDB 会長 J. B. Gurdon 博士より提携の申し出があり, \$300 の分担をもとめられている旨会長より説明された。提携する方針で進めることが了承されたが, 詳細についてはさらに検討することとした。

11) 次年度(1993年度)大会開催について

1993年度は, 5月26~28日福岡リーセントホテルにおいて開催予定(大会準備委員会山名清隆委員長)。

8. 大会準備委員会からの挨拶(浅島大会委員長)

第48回運営委員会報告

第47回運営委員会は、1992年7月11日午後1時30分より、東京大学理学部動物学教室において、運営委員全員出席のもとに開催された。

出席者（敬称略）：

江口吾朗（会長）、浅島 誠、天野 實、片桐千明（兼編集主幹）、近藤寿人、塩川光一郎（兼幹事長）、嶋田 拓（兼編集幹事）、竹市雅俊、中辻憲夫、長浜嘉孝、東中川徹、安増郁夫、山上健次郎、山名清隆、米田満樹（以上運営委員）、田代康介（庶務幹事）、浅野美咲（会計幹事）

審議事項

科学研究補助金の審査委員候補者の決定

平成5年度から新設される科学研究費補助金、分科基礎生物科学・細目発生生物学における第1段（2名）及び第2段（1名）審査委員候補者を前回の運営委員会で議論した選出方法に従って以下のようにして決定した。

1) 第1段審査委員候補者

江口会長より下記10名の候補者の推薦があり、その10名について審議した。その後2名連記による投票を行ない、上位2名を推薦することに決定した。

候補者（敬称略）：

天野 實、岩渕雅樹、岡田益吉、北村幸彦、黒岩 厚、近藤寿人、竹市雅俊、藤沢肇、星元紀、村松 喬

2) 第2段審査委員候補者

第2段審査の性質、候補者の適格性等について討論した後、2名連記で投票を行ない、上位1名を推薦することに決定した。

得票があった方々の氏名（敬称略）：

浅島 誠、天野 實、江口吾朗、片桐千明、近藤寿人、鈴木義昭、村松 喬、毛利秀雄、安増郁夫、山上健次郎

第25回総会報告

第25回総会は、1992年5月29日午後1時30分より、横浜市開港記念会館A会場において開催された。議長に野口基子氏（静岡大学理学部生物）を選出した後、以下の次第で議事がすすめられ、すべて了承された。

1. 浅島誠大会委員長
2. 挨拶江口吾朗会長挨拶
3. 報告、審議事項
 - 1) 庶務報告（田代康介庶務幹事）
本号運営委員会報告参照（P.4）
 - 2) DGD編集委員会報告
本号参照（P.4）
 - 3) 1991年度決算報告（浅野美咲会計幹事）
サーキュラー91号参照
 - 4) 会計監査報告（田沢栄五郎会計監査委員）
監査の結果、会計処理は適正であった旨報告された。
 - 5) 1992年度予算案（浅野美咲会計幹事）
サーキュラー91号参照
4. 学術会議報告（江口吾朗会長）
サーキュラー68号—本号参照
5. 審議事項
 - 1) DGD編集委員枠の拡大
本号運営委員会報告参照
 - 2) 科学研究費補助金分科「基礎生物科学」、細目「発生生物学」の審査委員候補者の選定について（本号会長挨拶、運営委員会報告参照）
 - 3) 選挙管理委員の選出
サーキュラー71号参照
6. 次期大会準備委員会から挨拶（野村一也氏（九大・理・生物））

DGD編集委員会より

◎Vol. 32, No. 1から本誌のサイズが上下に少し短くなりましたが、如何でしょうか。サイズのみならず、内容的にも国際的水準を行きたいと念じつつ編集にあたっております。最近投稿された方はお気づきの通り、論文が採択 (accept) されてから3～5ヶ月後には出版されており、これは隔月発行のジャーナルとしては精一杯のペースです。原稿を編集主幹が受けとってから査読を経て採否の判断をくださまでの期間については、これを1ヶ月を目標にして努力しておりますが、しばしば5～6週間を数えるに至っています。この期間の短縮にも努力を怠ってはいないつもりですので、どうかご理解ください。

◎経費節減のための協力の一環として、昨年別刷りの無料配布数を100部から50部に減らしましたが、これをゼロにせざるを得なくなりました。Vol. 34, No. 4 以後の Notice to Authors にその旨記述し、Vol. 35, No. 1 (1993年2月発行) に掲載の論文からこれを適用しますので、ご了承ください。

◎5月上旬に江口会長から会員あてに発送されたアンケートに対し、「DGDに対する意見・要望」として寄せられた回答のうち目ぼしいものを、会長から伝えて頂きました。それらをめぐって編集委員会でも意見を交換し、対応できるものについては直ちに対処しました。

・そのひとつが、5月29日の総会で承認された会則の付則第5条の改訂であり、これによってより広範な領域の委員からなる編集委員会を構成できる可能性を付与されたこととなります (別項「運営委員会報告」参照)。編集委員の主観的な意図とは別に、本誌が閉鎖的な印象を与えることが、これにより解消されることを望みます。

・速報 (ブリーフ・ノート) を設けてほしい、という要望がありましたが、これには直ちに応じ兼ねます。理由の第一は、専従の職員を欠く現編集体制ではこの種の新たな取り扱いを要する原稿に対応する余裕がないこと、第二に、その定義が曖昧で、これを安易に導入することによる質の低下を恐れる、というものです。

・投稿論文の英語に対する干渉によって不快感を味わった経験をお持ちの著者の方々にはお詫びするほかありません。言いわけめきますが、所詮は外国語に属することがらであり、たとえ英語を母国語とする人達のあいだでさえ“好み”による違いがあるのも承知のうえで、つい行きすぎた指摘がなされることがあるのです。著者の意図するところが正しく表現されているか否かを基準に、控えめを旨として対処しますので、ご理解ください。

・最後に、DGDのレベルを評価し、励ましの言葉も頂いたと聞いています。内容のある論文を投稿することにより実質的に支えてくださるよう、この場を借りてお願いいたします。

以 上

編集主幹 片 桐 千 明

日本発生生物学会第25回大会後記

大会委員長

横浜市立大学 浅 島 誠

日本発生生物学会第25回大会は横浜で、5月28日（木）～30日（土）の3日間、開催されました。横浜での大会は今回が初めてでしたので、会場探しから運営まで、手探りで行いましたが、多くの方々の御協力で、無事終えることができましたこと、関係者一同と共に喜んでいます。

会場となった横浜市開港記念会館は、国の重要文化財の指定を受けている近代ルネッサンス風建築様式のものであります。そのため、発生生物学という新しい大きな波と若い人達の討論の場として、マイク、プロジェクターなど設備や防音の面などで会場として適当かどうか心配でもありました。また運営面でも横浜市立大学生物学教室での発生生物学会の会員のスタッフは少なかったもので、市大関係者や大学院生など多くの方々に御協力をお願いしましたところ、快く引き受けて下さったことで、目途が立ち、開催を迎えることができました。

当初の予定とは違う大幅な変更もいくつかありました。その1つは大会参加者の多いことで、大会準備委員会としては正直、嬉しい悲鳴でありました。申し込み締切り日（3月12日）までの大会参加申し込みの内訳は、大会参加者数が323名、口頭発表126題、ポスター発表82題、シンポジウム5題、総計213題でした。これはどれをとっても過去、この学会として最も大きな数になっています。さらに、当日の参加者は297名で、本大会の参加者総数は620名という盛況さでした。A会場は講堂で350名近く入れるのですが、それに較べてB会場は200名近くしか入れない会場でしたので、大会の3日間、午前も午後も立ち見ができ、会場の入り口まで人であふれました。準備委員会としまして、B会場については机を減らして椅子を増やし、出入り口も増やすなど対応に努力したのですが、どうしても会場に入り切れない参加者が多く、参加者には勿論、演者の皆様方にも御迷惑をおかけしましたこと、お詫び致します。

口演発表では年々、分子や遺伝子レベルの内容が多くなってきていますが、今回もその傾向は続いているように感じました。ただし、扱う材料の変化や現象の再検討についてなされているものが目を引いたし、また若い人を中心に活発な討議がなされたのは良かったと思っています。口演については2会場、1人15分の口演時間をとったため、日によって朝9時から夕方7時までというハードな時間割りになりました。この方法ですと来年あたりから少し、変更が必要になるかもしれません。

一方、ポスター発表は総計82題で、2会場（PⅠとPⅡ室）にわけて第1日目と第2日目の2日間、行いました。最初、口演で申し込まれた方にも、こちらの方からの依頼で約30名ばかり、ポスター展示にまわっていただきました。ポスター会場では若い人が盛んに討議をしてくれました。予定の時間をすぎてもポスターのあちこちに人の輪ができていました。今回、ポスター発表

した人の中から、「口頭発表よりも、より実質的に討論がなされ、互いに深く鋭く討議がなされたので、良かった」との声が多く寄せられました。発表する人にとってポスター展示は準備や運搬などを考えれば確かに時間等、要することも多いけれども、研究者特に若い人にとって本当の勉強になることも多かったのではないかと思います。ポスター発表についてはサーキュラーの予告では、ポスター発表者1演題につき一人、スライド1枚を使って2分位、話してもらってから、その後、会場にゆく予定にしていたのですが、予想をはるかに越える発表者のため、これを行うと十分にディスカッションする時間がなくなると思い、中止しました。1つの新しい試みを行ってみようと思ったのですが、できなかったことをお詫びします。

第3日目の午後にシンポジウム「発生と形態形成因子—その最前線と残された課題」の企画・運営は、井出宏之先生（東北大・理・生物）にお願いしました。シンポジエストの先生方のお話しは実に内容豊かに多くのデータをわかりやすく、かつ生物学の本質的問題を扱っていたので、参加者に多くの感銘を与えました。また、このシンポジウムの最後には今年度の加藤賞の受賞者の永淵昭良氏（国立生理研）の記念講演もありました。終了が夕方遅くまでになりましたが、講堂のA会場に最後ま、非常に沢山の人が残って熱心に聴いていました。

大会2日目に行われました総会では、江口吾朗会長から今後のDGDの変革や科研費の件などいくつかの重要内容についての説明がありました。議長をして下さった野口基子先生（静大）の司会で、議事も十分に進みました。

2日目の夕方から会場を氷川丸に移して懇親会が行われました。懇親会は第1日目の夕方の時点で、既に定員の300名をオーバーしてしまいました。大会準備委員会側としては部屋数を最初の予約に加えて1つ増やすなどは行っただけですが、希望者全員が参加できる収容力がなくて申し訳なかったと思っています。予想を越える人が参加して下さり、並木先生の司会で和やかに進めることができました。船外では海上で花火が上がったり、外国客船のネオンなどもあり、「港横浜」を少しは楽しんでいただけたのではないかと思います。

今回、大会参加者は600余名でしたが、これは実に全会員のおおよそ3分の2弱に当たります。これだけ多くの方々に御参加いただいたことは大会準備委員会としては本当に感謝しています。運営費に関しては当初、準備段階で見積もったところ、赤字が出ることが予想されたため、横浜市立大学や神奈川科学アカデミー、その他いくつかの関係者から御援助いただいたことと、当日参加者が多く来ていただいたお陰で、無事、大会を終えることができました。関係各位と、この大会に御協力下さった横浜市立大学のスタッフと大学院生、その他の協力者に厚くお礼を申し上げます。

大会の運営に関して不備が多々あったことと思いますが、発表や討論を通して実質的な実り多き内容の大会にして下さった多くの参加者に紙上を借りて、お礼を申し上げます。

日本発生物学会第25回大会決算報告

大会運営関係経費

1. 収入の部

大会参加費	2,875,000 円
内 訳	
一般 (5,000円×395名)	1,975,000 円
学生 (4,000円×225名)	900,000 円
(非会員のシンポジウム招待者2名, 会場運営の学生会員を除く)	
学会本部からの補助金	250,000 円
運営委員会経費 (学会本部から)	44,800 円
神奈川科学アカデミーからの大会補助	650,000 円
横浜市からの大会補助	300,000 円
横浜市立大学後援会からの大会補助	100,000 円
広告代・寄付金	500,000 円
利 息	3,009 円

収入合計	4,722,809 円
------	-------------

2. 支出の部

講演要旨集の印刷費の一部負担	310,721 円
講演申し込み用紙・名札等の印刷費	363,693 円
会場設営費	699,732 円
会場運営経費	782,817 円
人件費	889,750 円
シンポジウム経費 (講師旅費・謝金を含む)	70,763 円
弁当経費	108,990 円
休憩室茶菓子経費	58,089 円
文具・通信費・準備委員会経費	425,197 円
編集・運営委員会経費	64,000 円
懇親会補助	448,689 円

支出合計	4,222,441 円
------	-------------

3. 残金 (DGD基金へ全額寄付)

500,368 円

懇親会経費

1. 収入の部

懇親会参加費 (5千円×265名=1,325,000円)	1,325,000 円
(シンポジウム招待者・アルバイト学生を含まず)	
広告代・寄付金からの補助	448,689 円

収入合計	1,773,689 円
------	-------------

2. 支出の部

懇親会経費	1,773,689 円
-------	-------------

支出合計	1,773,689 円
------	-------------

3. 残 金

0 円

大会感想記

赤坂 甲治 (広大・理)

日本発生生物学会第25回大会は、大正6年に建築された開港記念会館で、また懇親会は発生生物学会諸先輩のアメリカ留学の足ともなった氷川丸と、歴史的ロマンを感じさせてくれる両会場で行われた。特に懇親会では横浜どんたくの花火と南こうせつに歓迎されたのは望外の喜びで、浅島大会委員長の絶妙なる演出には感じいった。

以前から発生生物学会大会は活気にあふれていたが、今大会のポスター会場はすさまじいばかりの熱気で、口演会場も以前にも増して活発な討論が展開された。その大きな要因として考えるに、以前の発生学は暗闇の中を手探りで進んでいくようであったが、ようやく遙か向こうに光明が見えはじめ、発生学を志す者の姿がおぼろげながらも互いに見えるようになってきたのではないだろうか。今や用いる生物材料の枠を越えて、共通の言葉で議論できるようになった感がある。と言うことは、とりもなおさず発生学がかなり本質に迫りつつあるということではなからうか。

私はついこの前まで1年と数カ月間カリフォルニア大学パークレー校に留学していて、発生生物学会大会は2年ぶりであったが、プログラムを見ておやっと思った。それはショウジョウバエの演題数が全体の8%と、まだまだ少ないことである。発生学のきわめて重要な位置を占めるショウジョウバエが少ないのは寂しく思うが、2年前の6%と比べると少しずつではあるが増加しており、ようやく日本でもショウジョウバエが根づき、広がり始めたように見える。また、プラナリアが3題と、きわめて重要な古典的な問題を分子生物学の力で解きあかそうという試みがでてきたことはたのしみなところである。ところで、ウニを材料とした演題は2年前の7%から6%へ減少しており、10年前の14%から比べると激減していることは明かである。全体として演題数が増加し、発生学会が益々発展していく中で、かつて発生学の重要な位置を占めてきたウニが市民権を失いつつあることは非常に嘆かわしいことであるが、これはひとえにウニを材料に研究を進めている我々の怠慢であり、この事実を厳粛に受けとめたいと思っている。幸い、分子生物学の進歩と共に、*in vivo* 転写系、*in vitro* 転写系を用いることにより遺伝子の発現調節を担うシスエレメントの役割が決定できる様になったこと、ウニの一番の特徴である多量の同調胚が得られることを活かし、トランス因子が容易に精製できること等から再びウニが注目されてきており、現に研究者の就職難に喘ぐあのアメリカでウニをモデル生物として研究を開始する新人研究者が再び増えてきている。多くの人々に理解され、興味を持っていただいてこそ市民権。懇親会で岡田節人先生は——益々発展している発生学もまだまだ人々に理解されていないという厳然たる事実。我々は危機感を持って努力し、対処していかなくてはならない——と警告された。発生学の市民権、ウニの市民権を得るためにも一層の努力が必要と感じさせられた大会でもあった。

大会参加

古市涼子(九大・理・生物)

「学会」という言葉には妙にアカデミックな雰囲気があるように思う。その学会に自分が参加し、そのうえ発表までできるなどとは思ってもいなかった。

私のはじめて学会に参加したのは昨年の秋であった。卒論研究という名のもとに実験をはじめたばかりの、まだなにもわからない私（今もそうかわりはないかもしれないが）にとっては、学会は場違いな場所であり自分の居場所のないような気がして、不安な気持ちで毎日会場をうろろろしていたのを覚えている。しかもこのときは、名前だけはよく知っていた先生方の姿をみつければ喜び肝心の講演の時にはうとうとするという、実に不真面目な参加者でもあった。その私が修士となっていくなりの発牛学会で発表とは。うれしい半面、私にちゃんと学会発表が勤まるのかという心配があったが、自分の実験の結果を他の人にも見てもらいたいという気持ちが大きくて、先生や先輩方に助けていただきながら準備を進めた。スライド作り、原稿作りと準備の方は順調に進んだのだが、やはり私にとって初めての学会発表というのはかなりの重圧だったらしく、ある日の晩などは、次が自分の口演の番だということをいきなり知らされ「まだスライドも用意してないのにどうしょう」と半べそをかく、という夢まで見てしまった。目が覚めて夢だとわかった瞬間、このときほど嬉しかったことはない。

そうして眠れない夜は続き、ついに発牛学会の日がやってきた。ただ、私の発表は一日目の午後だというのがせめてもの救いだった。もしこれで三日目に発表なんてことにでもなっていたら、三日間ずっと緊張し続けて、しまいには胃がおかしくなりそうだった。当日の朝、会場に着いてみるとそこにはすでにたくさんの方々の姿が見受けられたが、前の動物学会のときのようにいちいち気にしている余裕もなく、ただひたすら自分の発表の原稿を読み返していた。午後になり、私のテーマに関係の多い内容の発表が続くので、しっかり聴かなくては、と思ってもつつい自分のことに考えがとんでしまい、何とも落ち着かないまま前の演者の番となった。前の演者というのは私の共同研究者というより指導者（にもかかわらず私はすっかり友達と同じに接している）だったので、自分のことのようにどきどきしながら次演者席から見上げていた。思えばこのときが最も緊張していたようで、ついに自分の番がやってきたときには、もうやるしかないと腹をくくったせいか、さっきまで口から飛び出しそうに脈打っていた心臓もだいたい静まり、我ながら妙に落ち着き払っていたように思う。しかし、壇上に上がり再び席に戻ってくるまでの時間は本当にあっというまだった。あとから考えるとあちこちの説明が足りなかったり、せっかくの質問にもあまり的確に答えられなかったりした気がするが、そのときにはここ2ヶ月ずっと心にかかっていたものがようやくなくなったようで、本当にほっとした。

こうして私の初の学会発表という大業は終わったが、大勢の方々に私の発表を見ていただけたのはたいへん嬉しかった。発表したのは約一年の間行った実験の結果であるが、その一年の区切りを発牛学会での口演という形で終えられて、とても光栄に思う。これからまた新たな気持ちで新たな試みを行っていきたい。そしてその結果を再びこの発牛学会で発表することができたらと願っている。

第25回大会の感想記

野 地 澄 晴 (徳島大学工学部生物工学科)

横浜市開港記念会館で開かれた第25回大会において、私の印象に残った発表を独断と偏見でいくつか選び、それについての感想を気楽な気持ちで書いてみた。最近、発生工学的手法を用いて興味ある遺伝子転写産物の役割を調べる研究が急激に増加しており、様々な遺伝子が対象になっている。日本においては、しかしまだ少数の研究室でしかそのような研究は行われていない。理研の相沢慎一のグループは、本大会において、テネイシンと fyn の役割を解明する目的で、胎児性未分化幹細胞 (ES細胞) において相同組換えを誘導してテネイシン欠損マウスおよび非レセプター型チロシンリン酸化酵素 fyn 欠損マウスを作製し、それらのマウスの解析を発表した。テネイシンについては相賀が発表した。彼女はテネイシンが神経系において神経細胞の発生分化過程で重要な役割を担っていると考えられていることなど、テネイシンに関する序論から始まり、ヘテロマウスの作製、ホモマウスの作製へと非常に聴衆をひきつける発表を行った。彼女の発表を聞いていると、簡単にホモマウスが作製できるような錯覚におちいってしまいそうであった。ホモマウス、つまり完全にテネイシン遺伝子の欠損したマウスが、どんなマウスになっているのか非常に興味をもって聞いていた。やがて、ホモマウスのスライド写真がスクリーンに映しだされたが、彼女の結果の説明は耳を疑うものであった。少なくとも、観察する限りでは顕著な変化は見られないとの報告であった。同様な結果は、ホメオボックス遺伝子やインターロイキン遺伝子の場合にも生じるらしい。様々な遺伝子がファミリーを形成していることが知られているが、少しずつ異なった遺伝子が、それぞれ少しずつ異なったタンパク質を産生し、少しずつ異なった役割を果たしているのかもしれないと、発表を聞いて感じた。もしかしたら、テネイシンの場合も何かがその役割を補っているのかもしれないと考えた。

イモリ、魚類、ニワトリやウズラにおいても遺伝子導入系が開発されており、本大会でもいくつかの報告がなされた。信州大の小野らは、ウズラの遺伝子導入系の確立をめざし、本大会では完全培養法について報告していた。ウズラは、6週間で産卵可能になるなど、サイズやコストの面からも鳥類における遺伝子導入の研究にも非常に有用であると考えられ、今後の研究の発展が期待される。このように、様々な系で遺伝子導入による発生の研究がおこなわれてきており、この分野はますます活発になってゆくと感じた。

中胚葉誘導のメカニズム解明が分子レベルでカエルの卵を用いて進んでいるが、本大会でもいくつかのグループから、アクチビン、アクチビンレセプター、フォリスタチンに関する報告があった。最近、Wnt-1/int-1 関連遺伝子群の初期胚における役割が着目されており、特に、Xwnt-8 の2次軸の形成能などが Melton らのグループから報告されている。アクチビンにより Wnt 遺伝子発現が誘導されるとの報告もあり、FGF, TGF β , Wnt ファミリー間の相互作用、ホメ

オボックス遺伝子発現誘導能，レチノイン酸との関連など，今後の発展が期待される。私としては，形成体におけるこれら役者の演じるストーリーは，ニワトリ肢芽の形態形成にも同じように成り立つと信じたく，その意味でも今後の展開に興味を持っている。

最後に，上皮間葉相互作用の解明において，非常に重要な発見が本大会で報告された。それは，バイオマテリアル研の平井らによるエピモルフィンの発見である。すでに Cell 誌に報告され，新聞等でも紹介されているが，エピモルフィンは間充細胞表面分子で，上皮組織の構築にかかわる重要な因子と考えられている。最近，エピモルフィン以外にも，アクチビン，Wnt，HGF など，間充組織から産生され上皮の形態形成にかかわる因子が発見され，上皮-間葉相互作用の分子メカニズムが次第に解明されている。まだ，解明しなければならない点ばかりだが，加速度的に発展する分野になると感じている。

もちろん，他にプラナリアの系や新しいマウスホメオボックス遺伝子の発見など興味ある発表があった。分子生物学の発展とともに発生分化における分子レベルでの解明が急速に進み，ますますおもしろい学会に発展してゆくであろう。

発生生物学会第25回大会に参加して

齊 藤 玉 緒（北大・理・植物）

発生生物学会第25回大会は去る5月28，29，30日，横浜市開港記念会館で行われました。私が発生生物学会に参加させて頂きましたのは今回で2回目なのですが，今回はこのような機会を頂きましたので，今回の大会についての感想を思いつくままに書かせていただきます。

昨年に続き，口演は2会場制をとっておりましたが，この形態は印象に残るものでした。また，ポスター会場についても同様で，参加者全員が2会場のポスター・セッションに参加できるよう工夫されており問題を深く掘り下げることが可能な形態であると思われました。質疑応答についても，非常に活発でいわゆる通り一遍のやりとりではないものばかりで緊張感あふれる学会であったと思います。

今回私はポスターで参加させていただきましたが，「何故 Polysphondylium なのか」「このタンパク質を研究することの意義は何なのか」といった質問を寄せられ，改めて研究の原点に立ちかえらなければならないと考えさせられました。このように毎日の実験の中で本来ならば常に自らにつきつけていかなければならない問題でありながら，つい忘れてしまいそうところを指摘されとても良い機会に恵まれたと思っています。また，このような質問を堂々と投げかけてくださった方々に大いに学びたいと考えております。

大会全体の内容については，分化・形態形成の演題が多いものの，昨年に続き神経系，受精，

成長に関する研究も見られましたし、昨年にはみられなかった「予定された細胞死」なども見られ、今後更に幅広い領域にわたるものとの印象を受けました。また、これに関係して、実験の手法についても、多種多様というようなイメージを受けました。やはり時流なのか、分子生物学的手法は多いように思いましたが、これはたぶん、この手法を道具として新たに発生学的な現象を解明しようとする姿勢をとれましたので、当面このような解析やその発展という研究が続くものと思われまふ。今後どのように展開されていくのか、来年の学会を楽しみにしております。

唯一残念なことといえば、昨年は10題近くあった細胞性粘菌に関する報告が、今回は私を含め3題であったことがあげられます。来年、細胞性粘菌を研究しておられる方々の発表をぜひ聞かせて頂きたいと思っています。

最後になりましたが、大会運営にあたり御尽力くださった浅島先生をはじめ諸先生方、関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

総会で思ったこと

松 田 良 一（東大・教養・生物）

自然科学を志す人間は研究上のことは勿論それ以外の物事も簡潔で筋の通った世の中になって欲しいと願う人種だと思う。しかるに昨年と今年の日本発生生物学会総会は何と形式的かつ一方的であったことか。会場が満員になった発表現場や懇親会とは対照的に総会には運営委員と一般会員計20名程度しか居なかった。これは学会総会なんぞそんなものとタカをくくる会員がいかにか多いかを物語っている。このままでは総会をやめて承認事項まで全て運営委員会にまかせてその結果をサーキュラーで後日報告すれば十分で、敢えて大会会期中の貴重な時間を費す必要は無いと思われる。だが本来は学会組織とは研究交流にとどまらずもっと社会的なものであるはずだ。それを支える総会もかつての発生生物学会ではもっと実質的で、議論に誰もが参加できる雰囲気があったのではないだろうか？ 私が感じた総会の問題点は次の通りである。

- (1) 時間の使い方について。各議題の承認ごとと同じ人物（会長又は幹事）が説明するにもかかわらず、何故わざわざ壇上とフロアーを行き来するのか？ 優勝力士の表彰は、いちいち土俵に上り下りすることでミステリアスな格調を昂める効果はあるのかもしれないが、実際的な人間の集まりでは虚礼を排してもっと手短かにやって欲しい。同じ人物が説明するのであればマイクから一步下がるだけで十分である。議長選出も手短かに済ませて欲しい。
- (2) このように形式的なことには必要以上に時間をかけながら、昨年のK議長も今年のN議長も総会の最後に「その他」としてフロアーからの一般会員の意見を求める時間的余裕すら残さず総会を閉じてしまった。これは会員の権利（嫌な言葉だが）を損なうものであり、あの

リベラルだった発生物学会総会もいつのまにかどこかの株主総会と同様に一方的になってしまったことを思うと誠に残念である。

この紙面を借りて恐縮ではあるが、私がフロアーからお聞きしたかった点を書いてみたい。

A. まず選挙について。私は1988年と1990年の選挙の時は海外に居たため投票すら出来なかった。1988年の場合は投票用紙が届いた日が投票締め切り日であった。これは選挙施行細則第3条1項に違反するので、その旨を当時の選管委員長であったH教授に申し入れたところ海外会員への配慮は次期選管への申し送り事項とする旨のご丁寧なお返事をいただいた。しかし、次の1990年の選挙では投票用紙と会員名簿すら送られて来ず（勿論会費は納入していたが）、投票が不可能であったばかりか選挙結果を伝えるサーキュラーも数ヶ月届かなかった。更に大会参加手続用紙等も1989年と1991年分は送られて来なかった。これまた会則第4条1項に明らかに反する。その時あらためて日本発生物学会が（DGDという有力国際誌の発行母体であるにもかかわらず）いかに閉鎖的組織であるかを思い知らされた。是非、今回の選挙は国の内外を問わず公正に会員の意志を汲み取る努力をして欲しいものだと思うが如何であろうか？ 大会への参加手続きについても同様である。それが無理ならば選挙細則第3条1項及び会則第4条1項に「但し、これは当面、国内会員に限るものとする」を加えるよう会則改正すべきだ。

B. 科研費について。江口会長から発生物学の細目化が認められたとの報告があった。その喜びに耐えないわけだが、審査員がたった3名で、しかも発生物学会ワクがたったの1名であることの事情説明を聞いた時は釈然としなかった。その主たる理由は文部省学術国際局の研究助成申請書類を扱う職員が6～7名しかおらず、審査員数をこれ以上多くすると人手が足らず審査員との連絡とりまとめ等が不可能になってしまうからというものだった。江口会長はじめ関係者各位のご尽力で発生物学という細目が出来たことは素晴らしく、不公平感の拭いきれない我が国の科研費審査制度が徐々にではあるが改善の兆しが見られる点で明るい事実ではある。しかしその一方で文部省はたった6～7名で全分野の書類を扱っている事実があり、もしもそれゆえに科研費審査制度がPeer review（それぞれの専門分野の研究者10名前後からなる評価委員会による審査制度）を含めたより公平な制度を導入する上で障害になっているとすれば全く情けない話だ。この辺について発生物学会さらには他の諸学会の対応はどうなっているのだろうか？ 我々が無策のまま看過しているならば文部省や大蔵省に対して「現状で満足している」と意志表示しているようなものだと思うが如何だろうか？

C. Bに派生して日本の科学行政について考えてみたい。私達自然科学を志す者は自らの研究に没頭し、新知見を求めより深い自然理解を得るべく努力することは当然であるが、研究を物質的に支える行政についてもある程度の関心を払う必要があると思う。その一例が本年初頭の新聞紙上ににぎわせたSSC（トランスファー溶液ではなくテキサスに建造中の超伝導超大型粒子加速器のこと）の資金援助に関する問題である。米国は日本の基礎科学ただ乗り

論を背景に、文部省科研費年間総額の2倍以上の援助を要求してきた。それに対し日本政府は自国の研究教育環境の貧困さも省みずにOKサインを出し、この8月中にも具体策を公表する予定だと聞く。この件に関し我が国の生物学系研究者の一部により昨年末、署名運動が展開された。その趣旨は基礎生物学系9学会の会長に対し、SSC援助以前に国内の基礎科学の研究補助を重視して欲しいという要望を政府に連名で出していただきたいというものであった。結局、日本分子生物学会、日本細胞生物学会、日本生物物理学会、日本生化学会、日本遺伝学会、日本ウイルス学会の学会会長が連名で鳩山文相に要望書を提出した(この経緯については日本細胞生物学会サーキュラー「細胞生物」Vol. 3, 2~4頁(1992)を参照)。この要望や昨年からのマスコミによる一連の大学実態の報道などが効を奏したのか、本年度の文部省科研費、国立大学設備整備費、大学院先端設備費等の微増をみたいとは周知の通りである。ただ、この学会長連名の要望書には我が日本発生物学会と日本動物学会、日本植物学会の学会長とも積極的に対応せず、その後の運営委や評議員委でも議論されなかったと聞いている。これら最も基礎生物学を標榜するにふさわしい3学会が、相変らず「武士は食わねど高楊枝」的体質であるならば残念至極である。我々も発生物学の細目化に満足せず、文部省科研費総額の増加、審査制度の見直しとそれにとまなう文部省の研究助成担当職員の増員を要望するなど日本の科学行政に対しもっと積極的な取り組みをして行く必要があると思う。さらに国立大学における文部省以外の各省庁からの研究費の得にくさや使いにくさの実態を調べ、学会として我が国の科学行政の一本化を主張して行くなどやらなければならないと思われる問題が山積しているはずだ。米国細胞生物学会がNIHの研究費ワク増額にむけてロビー活動を展開している事実も傾聴に値する。もっとも日本の学会の多くは細切れすぎて、それぞれが手弁当で運営されているのが実状であるから、発言力が弱い。恐らくその辺の手術も必要と思われる。しかし学術会議の長老たちにだけまかせておく事態ではないはずだ。まだ日本の自然科学者は、これからの社会を支えるノウハウを生み出す知的集団としてのプライドを持たないまま、社会の余剰で遊ばせてもらう知的寄生虫集団として受動的にひっそりと生きていくつもりなのだろうか？

末筆になりましたが、総会を除くと規模、アクティビティ共に記録破りだった第25回大会を企画運営して下さった浅島誠先生はじめ横浜市大のスタッフと学生の皆様に深く感謝いたします。

第42回科学講演会

主 催 : 財団法人 東レ科学振興会

千葉県浦安市美浜1丁目8番1号(東レビル)

TEL 0473 (50) 6104 FAX 0473 (50) 6082

後 援 : 朝 日 新 聞 社

と き : 平成4年10月26日(月)

開場: 17時30分

開演: 18時00分 終演: 20時45分

ところ : 有楽町朝日ホール

東京都千代田区有楽町2-5-1

有楽町マリオン11階(JR線有楽町駅前)

テーマ : “自然科学の原点, 博物学について考える”

～ナチュラル・ヒストリーのすすめ～

I. 博物学的発想とはなにか

京都大学理学部教授 日 高 敏 隆

II. 博物学としての生化学

北海道大学名誉教授 茅 野 春 雄

その他 :

★ 入場無料, 定員 638 名(予約なし・先着順)

★ ご来聴の方には, 後日講演記録集を進呈致します。

以上

分子神経生物学国際シンポジウム

—脳, 皮膚, 免疫系に共通するメカニズム—

資生堂では, 創業 120 周年を記念した科学シンポジウム「ヒューマン・ヘルス・サイエンスと皮膚」のサテライトシンポジウムとして, 「分子神経生物学国際シンポジウム—脳, 皮膚, 免疫系に共通するメカニズム—」を次のとおり開催します。

●会 期: 1992年11月13日 (金)

●会 場: 日仏会館 (東京都千代田区神田駿河台 2—3 ☎ 03—3291—1141)

●プログラム (予定):

・特別講演 ジーンターゲットング: 哺乳類の記憶と学習の分析への新しいアプローチ (マサチューセッツ工科大 利根川 進教授)

・セッション①神経系, 免疫系, 皮膚と細胞栄養因子

・神経—皮膚の細胞栄養因子相互作用

(マクマスター大 Diamond 教授)

・脳の神経細胞の生存を促進するタンパク質の探索

(マックスプランク研究所 Barde 教授)

・アミロイドタンパクと痴呆におけるその役割の研究

(ハーバード医大 Potter 助教授)

②情報伝達機構

・嗅覚受容器をコードしている遺伝子ファミリーの探索

(ハーバード医大 Buck 助教授)

・神経伝達物質と薬物受容器の構造

(京大 中西重忠教授)

・神経伝達物質と細胞栄養因子, 薬物によって活性化されるプロテインキナーゼ (神戸大 高井義美教授)

③神経発生・形態形成の分子細胞生物学

・神経細胞成長のメカニズム

(東大 廣川信隆教授)

・細胞間及び細胞—マトリックス間の接着を促進する分子—

(京大 竹市雅俊教授)

・体験, 薬物, 神経栄養因子による神経伝達遺伝子の制御

(ハーバード医大 Hyman 助教授)

・神経細胞間の結合 (シナプス) の形成

(ハーバード医大 Fischbach 教授)

- 募集人員：350名
- 募集締切り：1992年10月15日
- 参加費：5,000円（税込み）
- 参加登録方法：ハガキ又はFAXにて「サテライトシンポジウム参加希望」と明記のうえ、
「郵便番号」「住所（連絡先）」「氏名」「年齢」「電話番号」をそえて事務局へ
申し込む
- 事務局：〒141 東京都品川区西五反田3-9-1 ㈱資生堂研究開発本部学術部内
サテライトシンポジウム事務局
FAX：03-3490-6950
- 問い合わせ：☎ 03-3493-9356（電話での登録申込み不可）

第1回日本バイオイメーjing学会学術集会

と き：平成4年10月16日（金）

ところ：国際研究交流会館（国立がんセンター内）

東京都中央区築地5-1-1 TEL 03 (3543) 0332

—— 一般講演 ——

9：00～17：15

- 1) 蛍光性分子ロータとイメージング
- 2) エキソサイトーシス反応の定量的解析
- 3) 多形核白血球から産生される活性酸素の画像化
- 4) 光学顕微鏡でみるホルモン分泌過程
- 5) マウス腹水還流法による生体防御反応の視覚化
- 6) 生体の放射型イメージングにおける3次元像再構成に関する一考察
- 7) 赤血球中の小核のパターン認識による自動検定システムの開発：Micronucleus Analyzer
- 8) 多点リアルタイム赤血球速度ベクトル測定法及びその応用
- 9) コンピュータ支援画像処理による基質-寒天固層内プロテアーゼ活性の視覚化と定量化
- 10) 共焦点レーザー顕微鏡を用いたタンパクの新しい定量法
- 11) 酵素活性部位の化学修飾に伴う構造変化の画像解析
- 12) 安定同位体利用による免疫グロブリンの動的高次構造の解析
- 13) 分子グラフィックスとネットワーク

- 14) クリスタログラフィックワークベンチの構築
- 15) 超高倍微分干渉像と Ca 像の同時観察
- 16) IMRAS による細胞内カルシウム定量・画像解析の問題点とその改良
- 17) 細胞質から核へのカルシウムシグナル
- 18) 胸腺細胞での TCR を介したシグナル伝達：ネガティブセレクションに特有のユニークな $[Ca^{2+}]_i$ 上昇のコンピューター画像処理装置による解析
- 19) 高速共焦点レーザー顕微鏡による細胞内カルシウム動態の可視化
- 20) 好中球によるがん細胞障害活性への LUCT/IL-8 の関与
- 21) ナノメートル計測による赤血球膜蛋白質と裏打ち蛋白質の相互作用の解析
- 22) レーザー光ピンセット法による細胞膜上の受容体分子の操作：細胞膜の領域構造
- 23) 筋収縮に伴うミオシンの構造変化を蛍光標識法を利用してリアルタイムで検出するための基礎研究
- 24) 蛍光アクチン・ α -アクチニンの受精中の分布変化
- 25) 電子顕微鏡によるコラーゲン分子内の物理化学的情報の可視化
- 26) グラファイト表面処理と表面走査型顕微鏡による観察
- 27) 原子間力顕微鏡による細胞膜の裏打ち構造の観察：電子顕微鏡法との比較
- 28) 共焦点レーザー顕微鏡による培養細胞の干渉反射顕微鏡観察

17:15~1800

——特別講演——

Some Applications of IVEM and Image Processing (Dep. of Biology,
Univ. of Pennsylvania) Lee D. Peachey

参加費 (要旨集代を含む) 4,000円 (学生 2,000円)

懇親会 18:00~ 国際研究交流会館1階

(会費 1,000円)

連絡先: 〒467 名古屋市瑞穂区田辺通3-1

名古屋市立大学薬学部 中西 守

TEL 052 (836) 3411 FAX 052 (836) 3414

入会受付: 学会事務局

〒141 東京都品川区上大崎2-10-35

国立予防衛生研究所

生物活性・生体防御

鈴木 和男

TEL 03 (3444) 2181内線386

研究助成金公募のお知らせ

山田科学振興財団

申込書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)

〒 544 大阪市生野区巽西 1 丁目 8 番 1 号
電話大阪 06 (757) 3311 (代表)

1993年度研究援助候補推薦要項

援助の趣旨及び内容

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助を致します。実用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は 1 件当たり 300～700 万円、総額 6,000 万円、援助総件数は 10 件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考致します。
3. 援助金を給与に充てることは出来ませんが、他の用途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計 2 年間とします。

推薦方法

イ. 推薦者 本財団が依頼した(学)協会の代表者

ロ. 推薦件数 1 推薦者ごとに 2 件以内

ハ. 推薦手続 推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。

1. 所定の推薦書用紙又はその写しに必要事項を記入したもの 4 部
2. 添付書類(研一 5 ページ参照)

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日 本財団に推薦書が到着する締

切期日は 1993 年 3 月 31 日です。学会への締切は 2 月 28 日としますので、御注意下さい。

選考方法 選考委員会において選考の上、理事会が決定します。

選考結果の通知 1993 年 7 月迄に推薦者及び代表研究者等に宛てて通知します。

援助金の贈呈 選考結果の通知後適時贈呈致します。

研究の成果又は会計の報告

援助金の受領者に対して、必要に応じ、研究経過、研究成果、又は会計について報告書の提出又は発表をして頂きます。

付 記

ご提出頂きました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

1993年度長期間派遣援助申込要項

援助の趣旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事する研究者を国外に派遣し、学識を交換して学術の国際交流を促し、又研究を共にして相互に研究の学際的あるいは国際的進展を図る等のために、高度の研究活動を実施しつつある新進研究者若干名を、協同研究への直接参加を主目的として、長期間（通例6ヵ月～1ヵ年間）派遣するための渡航費、滞在中の国内旅費、滞在費等の援助を行います。

援助金額

- イ. 本年度の総額：短期間派遣援助と併せて4,500万円の予定
- ロ. 使途：渡航費、滞在中の国内旅費、滞在費

申込手続

- イ. 所定の用紙又はその写しに必要事項を記入して下さい。
- ロ. 直接指導者又は所属機関長による本申込及び本研究に対する評価又は推薦の文書
- ハ. 派遣中の具体的な研究計画書及びそれを本人が英、独或は仏訳したもの
- ニ. 受入先の発行した招聘状及び受入受諾を確証する約定書
- ホ. 派遣先と交わした申込者又はこれに代る人からの往復書信等の連絡文書
- ヘ. 研究報告のリスト
- ト. イ～ヘ. はおのおの3部（オリジナル1部、写し2部）ずつご送付願います。

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときは、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 外国人名は、フルネームを活字体で書

き、読み方をフリガナで示して下さい。

邦人名にはフリガナを付けて下さい。

申込期限

1992年11月30日（1993年4月1日～1994年3月31日に出発予定の方）

選考方法

選考委員によって選考の上、理事会が決定します。

選考結果の通知

申込者に宛てて通知します。

援助金の贈呈

申込者に宛てて適時贈呈します。

付 記

- イ. 援助金の使途を変更するときには、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 申込者には、援助による成果について報告書を提出して頂きます。
- ハ. 成果について刊行する場合には、本財団の援助による旨書き添え、その別刷1部をお送り下さい。
- ニ. ご提出頂いた申込書は返却致しません。

1992年度短期間派遣援助申込要項

援助の趣旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事する研究者を国外に派遣し、学識を交換して学術の国際交流を促し、又研究を共にして相互に研究の学際的あるいは国際的進展を図る等のために、高度の研究業績を持つ研究者を、講演、討論等を主目的として、短期間（通例3カ月間以内）派遣するための渡航費の援助を行います。

援助金額

イ. 本年度の総額：長期間派遣援助と併せて4,500万円の予定

ロ. 使途：渡航費

10月に出発予定の時は6月15日が申込期限に当たります）

選考方法

選考委員によって選考の上、理事会が決定します。

申込手続

イ. 所定の用紙又はその写しに必要事項を記入して下さい。

ロ. 集会の内容を紹介する文書 例えば、集会のサーキュラー及びプログラム等

ハ. 講演・発表等の要旨

ニ. 派遣先と交わした申込者又はこれに代る人からの往復書信等の連絡文書

ホ. 研究指導者又は所属機関長の推薦書

ヘ. 最近3カ年間の研究報告リスト

ト. イ～ヘ. はおのおの3部（オリジナル1部、写し2部）ずつご送付願います。

選考結果の通知

申込者に宛てて通知します。

援助金の贈呈

申込者に宛てて適時贈呈します。

付 記

イ. 援助金の使途を変更するときには、予め本財団の承諾を得て下さい。

ロ. 申込者には、援助による成果について報告書を提出して頂きます。

ハ. 成果について刊行する場合には、本財団の援助による旨書き添え、その別刷1部をお送り下さい。

ニ. ご提出頂いた申込書は返却致しません。

記載上の注意

イ. 紙面不足のときは、同型同大の別紙で追加して下さい。

ロ. 外国人名は、フルネームを活字体で書き、読み方をフリガナで示して下さい。

邦人名にはフリガナを付けて下さい。

申込期限

出発予定日より4カ月以前の月の15日（例：

1993年度短期間来日援助申込要項

援助の趣旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事、高度の研究業績を持つ在外の研究者が、学識を交換して学術の国際交流を促し、又研究を共にして、相互に研究の学際的あるいは国際的進展を図る等を目的として、短期間（通例3カ月以内）来日するための援助を行います。

但し、単に学会・集会のみ参加を目的とするものは除きます。

援助金

- イ. 本年度の総額：1,500万円の予定
- ロ. 使途：渡航費、滞在中の国内旅費、滞在費

申込手続

- イ. 所定の用紙又はその写しに必要事項を記入して下さい。
- ロ. 招聘状、推薦書、連絡の往復書信、申込者及び来日者の業績一覧表、その他申込者に於て補足説明を要すると判断される場合は、その説明書を添付して下さい。
- ハ. イ. ロ. 共おのおの3部ずつご送付願います。

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときは、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 外国人名は、フルネームを活字体で書き、読み方をフリガナで示して下さい。
- 邦人名にはフリガナを付けて下さい。

申込期限

1992年11月30日

（1993年4月1日～1994年3月31日に来日予定の方）

選考方法

選考委員によって選考の上、理事会が決定します。

選考結果の通知

申込者に宛てて通知します。

援助金の贈呈

申込者に宛てて適時贈呈します。

付 記

- イ. 援助金の使途を変更するときには、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 申込者及び来日者には、援助による成果について報告書を提出して頂きます。
- ハ. 成果について刊行する場合には、本財団の援助による旨書き添え、その別刷1部をお送り下さい。
- ニ. ご提出頂いた申込書は返却致しません。

(財)ブレインサイエンス振興財団、第7回研究助成候補者・
塚原仲晃記念賞受賞候補者及び第6回国際交流助成候補者
の推薦を公募

ブレインサイエンス振興財団では、平成4年度の助成、褒賞事業として下記の事業を行う計画で、候補者の推薦を公募している。

I. 助成、褒賞事業

1. 研究助成：ブレインサイエンスの分野において国際的評価に値する研究の助成。研究分野は、脳神経に関する実験的研究のみならず理論、モデリング研究をも含む。
助成件数 12件、1件 100万円
2. 塚原仲晃記念賞：生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者に賞牌及び200万円を贈呈。
(原則として1件)
3. 派遣助成：ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の共同研究のための研究者の海外派遣の助成。
往復渡航運賃を50万円を限度として若干件助成。
(助成総額 150万円)
4. 招聘助成：ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間(3ヶ月以内)の招聘(旅費または滞在費)を助成する。
(助成総額 100万円)

II. 推薦方法：関連学会代表責任者または研究者の所属機関長及び当財団の理事、評議員の推薦による。但し、所定の用紙に必要事項を記入すること。

III. 推薦締切日：1及び2については、平成4年11月30日(月)

3及び4については、平成5年1月11日(月)

IV. 選考：選考委員会での選考を経て、平成5年3月中に評議員会、理事会で決定。

注) 学会への締切りは、すべて1ヶ月前としますので、御注意下さい。

この事業の詳細については、下記へ照会されたい。

照会先 (財)ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2-6-20

ホンダ八重洲ビル内

電話 03(3273)2565

1993年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」

の受賞候補者及び研究助成候補者の推薦について

猿 橋 賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者（ただし、下記の推薦締切日で50歳未満）に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、略歴、主な業績文献リスト、及び、主な論文別刷10編程度をそえて、本会事務所までお送りください。
5. 締切は1992年11月末日（必着）。
6. 第13回の賞贈呈式は、1993年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第10回（1990）	筑波大学生物科学系助教授 「原生動物の行動の遺伝学的研究」	高橋三保子博士
第11回（1991）	北海道大学薬学部教授 「医薬品合成のための新しい反応の開発」	森 美和子博士
第12回（1992）	国立核融合科学研究所助教授 「高温プラズマの原子過程の研究」	加藤 隆子博士

研 究 助 成

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において 満40歳未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。
4. 締切は1992年11月末日と、1993年4月末日の2回。

なお、1991年度の研究助成金受給者は次の通りです。

氏 名	学 位	所 属	出張先
浅 野 素 子	理 博	国立共同研究機構分子科学研究所	アメリカ
		IMSフェロー	
小 才 知 子	修 士	工業技術院公害資源研究所主任研究官	アメリカ
朴(小野)恵淑	理 博	筑波大学地球科学系外国人研究者	アメリカ
森 陽 子	薬学修士	北里大学看護学部助手	フランス
山 崎 祥 子	理 博	奈良教育大学助教授	アメリカ

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電 話 03-3330-2 4 5 5

(FAX 兼用)

学術国際貢献特別委員会設置される

平成4年5月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月15日から17日まで第114回総会（第15期3回目の総会）を開催し、新たに「学術国際貢献特別委員会」を設置しました。今回の日本学術会議だよりでは、同総会の議事内容及び3月に開催されたAASSREC執行委員会等についてお知らせいたします。

旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について（会長談話）

平成4年2月25日
日本学術会議
会長 近藤次郎

ソ連邦が解体したことに伴い、旧ソ連邦における多くの科学者は、研究の継続が困難となり、研究組織も崩壊の危機に直面していると伝えられており、これが事実とすれば、世界に与えるその影響は計り知れないものがあると思われる。

いうまでもなく、人類の進歩にとって科学の向上発展は不可欠のものであり、その意味で、今日の旧ソ連邦の実情は憂慮に堪えないところである。

この際、我々日本の科学者は、学協会等を通じる等の方法で、旧ソ連邦の科学者に対し、能う限りの支援を行う必要があると考える。

なお、旧ソ連邦の科学者と我が国の科学者との間の一般的な国際学術交流・協力をより一層充実するための方策等については、我が国の学術の分野における国際貢献の一環として、日本学術会議において引き続き検討することとしたい。

（注）

本談話は、日本学術会議において国際交流・協力問題について調査・審議を行っている第6常置委員会から2月14日(金)の連合部会に問題提起され、各部会で検討され審議を経た後、2月25日(火)の第785回運営審議会に提案され審議されたものである。

第1日（4月15日）の午前。まず、会長からの前回総会以後の経過報告及び各部・各委員会等の報告が行われた。次いで、今回総会に提案されている2案件について、それぞれ提案説明がなされた後、質疑応答が行われた。

第1日の午後。各部会が開催され、午前中に提案説明された総会提案案件の審議が行われた。

第2日（4月16日）の午前。前日提案された案件の審議・採決が順次行われた。

まず、「副会長世話担当研究連絡委員会の運営について（申合せ）の一部改正」が採択された。これは、「副会長世話担当研究連絡委員会運営協議会」という名称を「複合領域研究連絡委員会運営協議会」に改めるとともに、運営協議会のより円滑な運営を図るために、必要な措置を講じたものである。

次いで、「学術国際貢献特別委員会の設置について（申合せ）」が採択された。これは、学術の分野における我が国の国際貢献の在り方について検討するための特別委員会を設置したものである。

なお、審議・採決の終了後、さきに会長談話として発表した「旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について（平成4年2月25日）」に関連して、旧ソ連邦の科学者の実情調査のために、当会議からロシアに派遣された第6常置委員会幹事の宅間会員から、その調査結果について報告が行われた。

第2日の午後。各部会が開催され、各部における懸案事項について審議が行われた。

第3日（4月17日）午前には、各常置委員会が、午後には、各特別委員会がそれぞれ開催された。

学術国際貢献特別委員会の設置

本会議は、昨年10月に開催した第113回総会における内閣官房長官からの学術の分野における我が国の国際貢献の在り方についての検討依頼を踏まえ、今回の第114回総会において学術国際貢献特別委員会を設置した。

日本学術会議第114回総会報告

日本学術会議第114回総会（第15期3回目の総会）は、4月15日～17日の3日間開催された。

AASSREC執行委員会の開催

去る3月23日から26日にかけて4日間、AASSREC (Association of Asian Social Science Research Councils) 執行委員会が日本学術会議の会議室で開催された。外国代表団は前AASSREC会長で現副会長のR・トリニダード教授(フィリピン社会科学協議会)、同じく副会長代行のJ・J・スモリッツ教授(オーストラリア社会科学アカデミー)、AASSREC事務局長のD・N・ダナガーレ教授(インド社会科学協議会)、同じく事務幹事のV・K・メータ博士(同上)のAASSREC側4理事と、タイバンコック駐在のUNESCO人間社会科学地域アドヴァイザーのY・アタル博士の5名。

日本側は、現AASSREC会長の川田侃日本学術会議副会長のほか、来年9月に川崎市のKSP(神奈川サイエンス・パーク)で日本学術会議が共催して開く予定の「AASSREC第10回日本総会」の組織運営委員会委員長山田辰雄教授(慶応義塾大学、アジア政経学会理事長)、同事務局長・平野健一郎教授(東京大学、アジア政経学会前理事長)、及び日本学術会議AASSREC専門委員会幹事浦田賢治会員(第2部)の3名がオブザーヴァーの資格で参加、連日、時間を措きむかのように、AASSRECの運営や来たるべき第10回総会の打合せなどについて、熱心な討議が続けられた。

また討議の合間を縫うようにして、外国代表団は近藤次郎日本学術会議会長表敬訪問、日本学術会議運営審議会における挨拶などのほか、川崎市にも赴き市長表敬訪問、KSP視察などを精力的に行った。日本学術会議も、近藤会長主宰のレセプションを催し、関係諸国の東京駐在大使館スタッフなどを招いて、アジア・太平洋地域における学術交流と発展のための意見交換の場を設け、友好的な雰囲気の中で談話が風発、至るところで談笑の花が開いた。

AASSRECはアジア・太平洋地域の社会科学領域における国際学術上部組織で、いわゆるアンブレラ・オーガニゼーションである。1973年にインドのシムラで「社会科学の教育・研究に関するアジア会議」が開かれた際に設立が合意され、それ以来UNESCOの協力のもとに発展を遂げてきた。AASSRECは加盟各国それぞれの文化的伝統を尊重しつつ、社会科学の研究、教育、知識の普及などを促進することを通して、この地域における社会科学の発達を図ることを目的に、加盟諸国の社会科学協議会、またはこれに類する団体(1国1会員)により構成されている。

加盟国はオーストラリア、インド、中国、ニュージーランド、フィリピンなど、1991年8月現在、15ヵ国であるが、国(くに)会員のほかに、準会員の制度もあり、将来この地域の各国の学協会や研究所等が準会員としてAASSRECの活動に参加する道も開かれている。出版活動としては、隔年に開催される総会における諸報告やシンポジウムなどの出版のほか、定期刊行物「aassrec panorama」が年2回出されている。

AASSRECには最高決定機関である総会のほかに、会長、副会長(2名制)、事務局長の4名で構成される理事会が置かれているが、これにさらにUNESCOの地域アドヴァイザーが加わって開かれる執行委員会に事実上の運営権限があるように見える。今回、日本学術会議で開かれた会議はAASSRECとしては極めて重要な会議であったといえる。AASSRECはUNESCOによって承認された「非政府機関(NGO)」の地位をもち、絶えずUNESCOと緊密な関係を保っているが、同じくUNESCOによって承認されたNGOの地位をもつIFSSO(国際社会科学団体連盟)とも相互協力関係にある。

平成4年(1992年)度共同主催国際会議

日本学術会議では、我が国において開催される学術関係国際会議のうち毎年おおむね6件について、学・協会と共同主催している。

本年もまた、6件の国際会議を共同主催することとしており、その概要は、次のとおりである。

◆第5回世界臨床薬理学会議(7月26日～31日)

この会議は、臨床薬理学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市(横浜国際平和会議場)において開催される。

参加予定人数は3,000人(国外1,500人、国内1,500人)、参加予定国数は49か国。

◆第14回国際平和研究学会総会(7月27日～31日)

この会議は、平和学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市(国立京都国際会館及び立命館大学)において開催される。

参加予定人数は450人(国外250人、国内200人)、参加予定国数は45か国。

◆第8回国際バイオレオロジー会議(8月3日～8日)

この会議は、バイオレオロジー学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市(横浜国際平和会議場)において開催される。

参加予定人数は500人(国外150人、国内350人)、参加予定国数は26か国。

◆国際地質科学連合評議会及び第29回万国地質学会議

(8月24日～9月3日)

国際地質科学連合評議会は、同連合の最高決定機関であり、運営事項を協議、決定することを目的とするものである。また、万国地質学会議は、地質学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市(国立京都国際会館)において開催される。

参加予定人数は5,300人(国外3,200人、国内2,100人)、参加予定国数は94か国。

◆第9回国際光合成会議(8月30日～9月5日)

この会議は、光合成に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として名古屋市(名古屋国際会議場)において開催される。

参加予定人数は1,000人(国外500人、国内500人)、参加予定国数は41か国。

◆第11回国際光生物学会議(9月7日～12日)

この会議は、光生物学に関する研究を進展させるため討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市(国立京都国際会館)において開催される。

参加予定人数は1,000人(国外600人、国内400人)、参加予定国数は52か国。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

お知らせ

＜DGD基金について＞

前号のサーキュラー発行時より現在までに、以下の会員の方から御寄付を頂きました。厚くお礼申し上げますとともに、お名前をここに記して感謝致します。

学会の財政は窮状を脱していない状態が続いています。どうか引き続きDGD基金に御寄付頂きますようお願い致します（巻末の振替用紙を御活用下さい）。

記

竹 内 拓 司

会 員 異 動

(1992年2月～6月)

<新入会員>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
竹島 一仁	名大・アイソトープ総合センター	〒464-01名古屋市千種区不老町 ☎ 052-781-5337	①両生類初期胚の分化誘導 ②イモリ
松崎 貴	理化研・ライフサイエンス筑波研究センター	〒305 つくば市高野台3-1-1 ☎ 0298-36-3522	①初期発生過程の分子発生 ②ゼブラフィッシュ
足立 伸次	北大・水産学・淡水増殖学	〒041 函館市港町3-1-1 ☎ 0138-41-0131	①配偶子形成の制御 ②サクラマス, ウナギ
塩田 浩平	京大・医・解剖学第一講座	〒606 京都市左京区吉田近衛町 ☎ 075-753-4341	①正常及び異常形態形成 ②げっ歯類, サル, ヒト
水野 敦子	雪印乳業(株)生物科学研究所	〒329-05栃木県下都賀郡石橋町下石橋519 ☎ 0285-53-1551	①発生における遺伝子発現制御 ②ヒト, マウス
三羽信比古	広島県立大・生物資源	〒727 庄原市七塚町562 ☎ 08247-4-1000	①プログラム死 ②脳
山岸 敏之	横浜市立大・総合理学研究所	〒236 横浜市金沢区瀬戸22-2 ☎ 045-787-2214	①中胚葉誘導について ②両生類
山田 亨介	名大・理・分子生物学科第五講座	〒464-01名古屋市千種区不老町 ☎ 052-781-5111	①初期胚への外来遺伝子の導入, 発現 ②イモリ
浅野 美咲	東大・理・動物学	〒113 文京区本郷7-3-1 ☎ 03-3812-2111	①初期胚における体軸形成 ②アフリカツメガエル
佐藤 英明	東大・医科研・獣医学	〒108 港区白金台4-6-1 ☎ 03-3443-8111	①卵形成 ②マウス
岡本 仁	岡崎共同研究機構・基礎生物学研究所	〒444 岡崎市明大寺町西郷中38 ☎ 0564-55-7520	①神経発生生物学 ②ゼブラフィッシュ, メダカ
小宮 透	新技術事業団古沢発生遺伝プロジェクト	〒300-26つくば市東光台5-9-6 日本重化学工業(株)筑波	①生殖細胞決定に関する遺伝子の解析

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
		研究所内 ☎ 0298-47-5531	②アフリカツメガエル
白川 英樹	東京女子医大・第二生理学	〒162 新宿区河田町8-1 ☎ 03-3353-8111	①受精時の細胞内現象 ②ハムスター
鈴木 操	新技術事業団古沢発生遺伝子プロジェクト	〒300-26 つくば市東光台5-9-6 日本重化学工業㈱内 ☎ 0298-47-5531	①transgenic mouse, gene targeting ②マウス
村松 寿子	鹿児島大・医・生化学第二	〒890 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1 ☎ 0992-64-2211	①Midkine(MK)の生理機能 ②マウス, EC細胞
毛利 孝之	九大・農・動物学	〒812 福岡市東区箱崎6-10-1 ☎ 092-641-1101	①生殖細胞に関する研究 ②イエコウモリ, ユビナガコウモリ
榎原 健二	高知大・理・生物	〒780 高知市曙町2-5-1 ☎ 0888-44-0111	①形態形成 ②ミサキマメイタボヤ
榎三好隆太郎	東大・理・動物学	〒113 文京区本郷7-3-1	①初期胚における遺伝子発現 ②アフリカツメガエル
安達 卓	愛知県がんセンター・放射線部	〒465 名古屋市千種区鹿子殿 ☎ 052-762-6111	①PTTHの遺伝子解析 ②カイコ, エリサン
榎正田 昭士	筑波大・応用生物化学・村上研	〒305 つくば市天王台1-1-1 ☎ 0298-53-6511	①初期胚における細胞成長因子の役割 ②アフリカツメガエル
榎犬塚 学	京大・ウイルス研究所がんウイルス部門細胞制御	〒606-01 京都市左京区聖護院川原町 ☎ 075-751-4030	①ポリオーマウイルスエンハンサー結合因子
榎岩井裕希子	筑波大・生物科学系	〒305 つくば市天王台1-1-1 ☎ 0298-53-4909	①卵形成過程の解析 ②キイロショウジョウバエ
榎上田 恵理	静岡大・教養・生物学	〒422 静岡市大谷836 ☎ 054-237-1111	①MPFによる中心体微小管形成の活性化 ②ウニ卵
榎浦瀬 香子	東京都立大・理・生物学科	〒192-03 八王子市南大沢1-1 ☎ 0426-77-2573	①上皮分化に関わる間充織因子の解析 ②ニワトリ

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
㊦遠藤 啓太	筑波大・生物科学研究科	〒305 つくば市天王台1-1-1 ☎ 0298-53-4909	①生殖細胞の分化機構 ②キイロシヨウジョウバエ
㊦小田 広樹	京大・理・生物物理学	〒606 京都市左京区北白川追分町 ☎ 075-753-4195	①カドヘリン ②シヨウジョウバエ
㊦糟谷 泰代	名大・理・生物学・神経発生学	〒464 名古屋市千種区不老町 ☎ 052-781-5111	①A5分子の発現, 機能 ②ニワトリ
㊦木村 芳滋	京大・理	〒606-01京都市左京区北白川追分町 ☎ 075-753-4195	①細胞接着分子 ②脊椎動物
㊦鈴木 崇人	山形大・理・生物	〒990 山形市小白川町1-4-12 ☎ 0236-31-1421	①受精生理 ②イモリ
㊦鈴木 誠	山形大・理・生物学	〒990 山形市小白川町1-4-14 ☎ 0236-31-1421	①受精生理 ②メダカ
㊦西田 幸代	山形大・理・生物学	〒990 山形市小白川町1-4-12 ☎ 0236-31-1421	①受精生理 ②アカハライモリ
㊦原 健二	高知大・理・生物	〒780 高知市曙町2-5-1 ☎ 0888-44-0111	①形態形成 ②ミサキマメイタボヤ
㊦彦坂 暁	京大・理・動物・分子発生	〒606-01京都市左京区北白川追分町 ☎ 075-753-4095	①胚発生における細胞分化の分子生物学 ②ホヤ
㊦古市 涼子	九大・理・生物・発生生物学	〒812 福岡市東区箱崎6丁目 ☎ 092-641-1101	①初期胚における背腹軸決定機構 ②アフリカツメガエル
㊦松本真佐美	山形大・理・生物学	〒990 山形市小白川町1-4-12 ☎ 0236-31-1421	①受精生理 ②ヒメダカ
㊦宮田 卓樹	高知医科大・第二生理学	〒783 南国市岡豊町小蓮 ☎ 0888-66-5811	①中枢神経系の発生分化 ②マウス, ニワトリ
㊦吉田 尚弘	熊本大・医・免疫医学研究施設病理学	〒860 熊本市本荘2-1-1 ☎ 096-344-2111	①c-kit 分子の機能 ②マウス
㊦北林 一生	理化研・筑波ライフサイエンスセンター	〒305 つくば市高野台3-1-1 ☎ 0298-36-3612	①マウス初期発生 ②embryonal carcinoma
㊦金井(東)正美	東大・農・獣医解剖学	〒113 文京区弥生1-1-1 ☎ 03-3812-2111	①胎盤形成における栄養膜細胞の分化機構

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
			②マウス
相賀裕美子	理化学研究所	〒305 つくば市高野台3-1-1 ☎ 0298-36-5264	①初期発生における遺伝子発現
			②マウス
竹田 直樹	理化研・分子腫瘍学	〒305 つくば市高野台3-1-1 ☎ 0298-36-5265	①変異マウスの作製
			②マウス
鈴木関 祥子	東京医歯大・歯・顎研究発生	〒113 文京区湯島1-5-45 ☎ 03-3813-6111	①2次口蓋形成の分子生物学
東 雄二郎	名大・理・分子生物・第5講座	〒464-01名古屋市中千種区不老町 ☎ 052-781-5111	①形態形成
			②マウス
加藤 基恵	㈱食品薬品安全センター・秦野研究所	〒257 秦野市落合729-5 ☎ 0463-82-4751	①生殖細胞における突然変異の誘発
			②マウス
豊原 治彦	京大・農・水産学科	〒606-01京都市左京区北白川追分町 ☎ 075-753-6213	①初期発生
			②メダカ
武藤 吉徳	岐阜大・医療技術短期大学部	〒500 岐阜市北野町70-1 ☎ 0582-62-1435	①イオンチャンネル
鈴木中村 律子	広島大・理・動物学	〒724 東広島市鏡山1-3-1 ☎ 0824-22-7111	①in vitro におけるもの誘導
		内線2820	②ラット, マウス
鈴木梅園 良彦	神戸大・理	〒657 神戸市灘区六甲台町1-1 ☎ 078-881-1212	①再生の分子機構
			②ナミウズムシ
鈴木高 知愛	大阪大	〒560 豊中市侍兼山町1-1 ☎ 06-844-1151	①筋発生
		内線4301	②ニワトリ
鈴木荒井 昭雄	東邦大・理・生物・発生学	〒274 船橋市三山2-2-1 ☎ 0474-72-1141	①ATP ase
			②アフリカツメガエル

<住所, 変更>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
北嶋 隆		〒197 町田市旭町2-2-16 アーバンハウスアサヒ 205 ☎ 0427-20-5431

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
橋本 有弘	三菱生命研・細胞化学	〒194 町田市南大谷11 ☎ 0427-24-6265
𨔵谷村 明彦	東日本学園大・歯・歯科薬理学	〒061-02北海道石狩郡当別町金沢1757 ☎ 01332-3-1211
𨔵浅賀 宏昭	都老人・研細胞化学	〒173 板橋区栄町35-2 ☎ 03-3964-3241 内線3067
北村 邦夫	三菱生命研・神経発生学	〒194 町田市南大谷11 ☎ 0427-24-6307
酒井 彦一	日本女子大・理・物質生物科学	〒112 文京区目白台2-8-1 ☎ 03-3943-3131
富永 彬生	愛媛県立医療技術短期大・臨床 検査学科	〒791-21愛媛県伊予郡砥部町高尾田543 ☎ 0899-58-2111
御子柴克彦	東大・医科研	〒108 港区白金台4-6-1 ☎ 03-3443-8111 内線315
阿部 知顕	東北大・理・生物学	〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉 ☎ 022-222-1800
松本 緑	東工大・生命理工・分子発生学	〒227 横浜市緑区長津田町4259
細谷 夏実	大妻女子大・社会情報学部 講座	〒206 名古屋市上小山田町9-1 ☎ 0423-39-0083
𨔵大隅 圭太	東工大・生命理工・生体機構	〒227 横浜市緑区長津田町4259 ☎ 045-922-1111 内線2135
中塚 光史	ベーリンガー・マンハイム東宝 𨔵京都研究所	〒617 長岡京市勝竜寺近竹7-4
吉田 昭広	生命誌研究館設立準備室	〒105 港区虎ノ門2-3-13 18森ビル11F ☎ 03-3595-1455
光永 敬子	都臨床研・放射線医学	〒113 文京区本駒込3-18-22 ☎ 03-3823-2101 内線5324
高橋 純夫	岡山大・理・生物	〒700 岡山市津島中3-1-1 ☎ 0862-51-7866
黒田 行昭	麻布大・環境保健・遺伝子・細胞生物学	〒229 相模原市淵野辺1-17-71 ☎ 0427-54-7111
西駕 秀俊	東京都立大・理・生物・発生生物学	〒192-92八王子市南大沢1-1
田原 胖		〒560 豊中市桜の町1-5-7 (自宅)

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
梅田 民樹	神戸商船大・物理	〒658 神戸市東灘区深江南町5-1-1 ☎ 078-453-2332 内線461
田中 英明	熊本大・医・脳免疫統合科学系 神経分化学	〒860 熊本市本荘2-2-1
清水 克彦	慶應義塾大・生物学	〒223 横浜市港北区日吉4-1-1 ☎ 045-563-1111 内線2602
橋戸 和夫	国立循環器病センター研究所バ イオサイエンス部	〒565 吹田市藤白台5-7-1 ☎ 06-833-5012 内線2602
徳永 智之	農林水産省畜産試験場繁殖部細 胞操作研究室	〒305 茨城県稲敷郡茎崎町池の台2 ☎ 0298-38-8634
成田 正見	小野薬品工業(株)水無瀬研究所	〒618 大阪府三島郡島本町桜井3-1-1 ☎ 075-961-1151
大塩 一郎	富山化学工業(株)総合研究所第一 研究所第二研究部	〒933 高岡市大坪町3-12-4 ☎ 0766-23-3618
永田 三郎	日本女子大・理・物質生物科	〒112 文京区目白台2-8-1 ☎ 03-3843-3131 内線7378
(株)西條 幸男	三菱生命研・細胞生物学	〒194 町田市南大谷11 ☎ 0427-24-6248
(株)田畑 純	阪大・歯・口腔解剖学第一教室	〒565 吹田市山田丘1-8 (自宅)
吉原基二郎	群馬大・医学部附属行動医学研 究施設・行動生理部門	〒371 前橋市昭和町3-39-22 ☎ 0272-31-7221 内線2604
山濱 由美	浜松医大・生物学	〒431-31 浜松市半田町3600 ☎ 053-435-2317
足立 勇博	持田製薬	〒412 御殿場市川島田977-4 持田製薬爽風寮A-103 (自宅)
桑 昭苑	東大・医科研・化学研究部	〒108 港区白金台4-6-1 ☎ 03-3443-8111
安達 卓	愛知県がんセンター研究部	〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1 ☎ 052-762-6111

<退 会>

大津 高, 山崎 正博, 大沢 浩一, 小林 弘, 友田 淑郎, 佐々木 洋, 一條 裕之
 玉手 英利, 森岡 瑞枝, 朝田総一郎, 馬岡 陽, 中野大三郎, 佐野 亨, 長沢 康男
 波磨 忠雄, 米谷 尚子, 山本 芳実, 原 健二

〔賛助会員〕

- | | | |
|-------------------------|-------|---|
| 組織培養はパイレックス・コーニングの岩城硝子㈱ | 〒 100 | 千代田区丸の内3-2-3
TEL 03-3214-6221 |
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書㈱ | 〒 210 | 川崎市幸区塚越2-260
TEL 044-533-0470 |
| 試薬・機器の御用命は名古屋片山化学㈱まで | 〒 460 | 名古屋市中区丸の内3-11-14
TEL 052-971-6531 |
| 日製産業株式会社 | 〒 453 | 名古屋市中村区名駅4-6-18
(名古屋ビル内)
TEL 052-583-5846 |
| 発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館 | 〒 102 | 千代田区九段南4-3-12
TEL 03-3262-5256 |
| 藤本理化 | 〒 113 | 文京区向ヶ丘2-34-12
TEL 03-3827-8151 |
| 三菱化成生命科学研究所 | 〒 194 | 町田市南大谷11
TEL 0427-24-6226 |
| 明治乳業㈱ヘルスサイエンスセンター | 〒 104 | 中央区京橋2-3-6
TEL 03-3271-4333 |
| 試薬及び理化学機器販売の理科研㈱ | 〒 463 | 名古屋市守山区元郷2-107
TEL 052-798-6151 |
| 科学の技術に奉仕する理工学社 | 〒 113 | 文京区本駒込5-9-10
TEL 03-3928-5211 |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬㈱ | 〒 606 | 京都市左京区北白川西伊織町25
TEL 075-721-0491 |

(50音順)

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 江口 吾朗

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約 900 名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学者の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌 “Development, Growth and Differentiation” (DGD) もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお、賛助会員は年 3 回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物（会員名簿を含む）が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒 113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学理学部動物学教室内

.....切.....り.....取.....り.....線.....

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

会 社 名

⑨

担当者名
電話番号

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学，医学，薬学，農学をはじめ分子生物学，細胞生物学，遺伝学など，さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり，国内外に約900人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は，日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し，国内に約1,000部，国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下，本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等，是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
DGD本誌	1 頁	年6回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション・	1 頁	年3回	30,000円
サーキュラー	半 頁	〃	15,000円

申し込み先：日本発生生物学会

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部動物学教室内

.....切.....り.....取.....り.....線.....

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

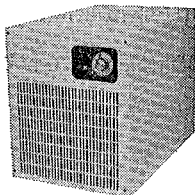
広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ DGD本誌	1 頁
☐ 〃	半頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半頁
住 所	
会 社 名	
担当者名	
電話番号	

加熱冷却ユニット

クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

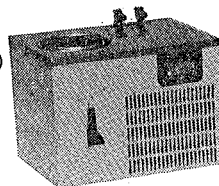
形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120ℓ	¥213,000
HC101A-3	100W	300W	160ℓ	¥225,000
HC131A-5	130W	500W	260ℓ	¥239,000
HC201A-5	200W	500W	360ℓ	¥258,000
HC301A-5	300W	500W	670ℓ	¥321,000
HC401A-5	400W	500W	1000ℓ	¥360,000



低温恒温循環水槽

実験台上でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をそなえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

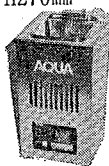
形式:CT 65-300-S
使用温度範囲:0~50℃(±0.1℃)
外形寸法:W420×D330×H340mm
槽内寸法:φ153×H187mm
冷凍機:65W ヒーター:300W
価格:¥250,000



超小型ウォーターバス式インキュベーター

極めてコンパクトにまとめた超小型の恒温槽です。50ml程度のピーカーや小型の試験管数本の恒温を得る用途に適しています。

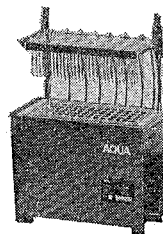
形式:CTH-100(加熱専用型)/CTC-100(加熱冷却型)
外形寸法:146×176×h225mm/146×176×h270mm
温度範囲:室温+5°~60℃/ +5°~60℃
温度精度:±0.05°~±0.1℃
槽材質:ステンレス SUS304
槽内寸法:98×100×h59mm
本体価格:¥98,000/¥168,000



ゼットコンデンサー

空気または窒素ガスを試験管内に吹きつけ、溶媒の蒸発を促進し、濃縮時間を短縮する装置です。

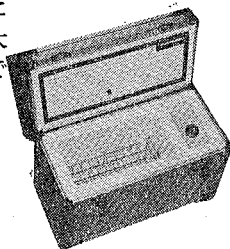
形式:JC 70-300
外形寸法:350×191×h540mm
槽内寸法:300×120×h70mm
温度範囲:室温~100℃±0.4deg
吹出ノズル本数:70本
ヒーター:300W
空気ポンプ:20W
電源:100V
価格:¥310,000



恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微量にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので可動性に富みどこでも使えます。

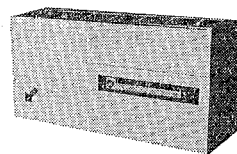
形式:CTC-422
外形寸法:407×193×H298mm
庫内寸法:246×122×H200mm
コントローラー:デジタル設定, デジタル表示
価格:¥88,900(蓄冷体-5℃付)



温度勾配装置(ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。振とう装置付きもあります。

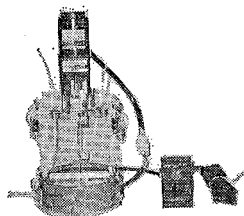
形式:TGW-3(三連)/TGW-5(五連)
使用温度範囲:0~50℃
温度調節精度:±0.05~±0.1℃
槽内寸法:150×260×150×3/×5
冷凍機:200W/300W
ヒーター:90W×3/×5
価格:¥788,000/¥970,000



本城式プランクトン濃縮装置

プランクトンを効率よく回収する装置です。プランクトン細胞の崩壊が少なく、低濃度で分布している種類を観察することができます。ろ過水はプランクトンの体液が混入しない純水なものが得られます。ろ紙の表面は目詰まりしにくく早い流速が得られます。

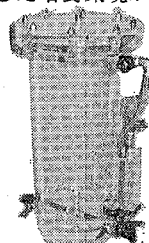
形式:PC15-S
回収率:80~95%
価格:¥98,000



加圧式インキュベーター

空気または不活性ガスで加圧した環境下で各種生物を培養する装置です。新鮮な空気を常に供給しながら一定圧を保つことができますので安定した培養環境が得られます。

形式:PI 203
最大使用圧力:2.5kg/cm²
内寸法:φ190×h440mm
外形寸法:φ280×h530mm
本体材質:透明アクリル
価格:¥198,000(加圧ポンプは別)
給水装置 減圧弁・安全弁付



生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

細胞機能に影響しません

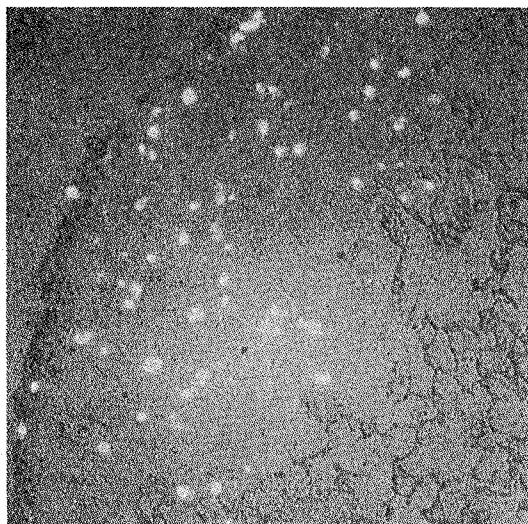
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

簡便です

従来 ^{51}Cr 等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では in vivo でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社

ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164 (代表)
東京 (03) 3828-6544 (代表)

マウスのテラトーマ

—EC細胞による哺乳動物の実験発生学—

森脇和郎／序

野口武彦 村松 喬／編集

定価 3914 円 (税込) A 5 判・296 頁・並製

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説してあります。

哺乳動物の初期発生

—基礎理論と実験法—

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明

鈴木秋悦 館 郷／編集

定価 15450 円 (税込) B 5 判・480 頁・上製

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

体細胞遺伝学

山根 績 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

定価 10094 円 (税込) A 5 判・720 頁・上製

H V J による細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

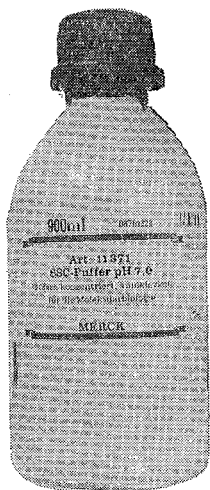
理工学社

東京都文京区本駒込5-9-10 電話 03(3828)5211(代) 振替口座番号 東京1-34676 〒113

**KANTO
BIOCHEMICALS**

MERCK

トランスファー& ハイブリダイゼーション用試薬



メルクではサザン、ノーザントランスファーとハイブリダイゼーションに用いる試薬を調製し、濃縮タイプまたは Ready-to-use タイプとして取り揃えました。

トランスファー用試薬

SSC溶液 pH7.0
20×濃縮液 900ml
オートクレーブ済
DNase、RNase及び
protease フリー

ハイブリダイゼーション用試薬

デンハールト溶液
50×濃縮液 10ml調製用
凍結乾燥品

なお、上記以外の関連製品及び詳細につきましては下記までお問い合わせ下さい。



関東化学株式会社 試薬事業本部

103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 03(3663)7631
541 大阪府中央区瓦町2丁目5番1号 06 (222)2796

KITAZATO®

安定した至適温度での観察に!!

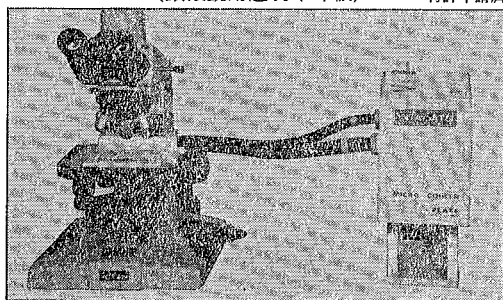
新発売

冷却タイプ

マイクロクーラー・プレート®

(顕微鏡用透明冷却板)

特許申請済



マイクロクーラー・プレートは、室温から -25°C (MC-100)の範囲で霜(曇り)を防止した状態で設定した温度に自動制御します。電子冷却方式の為液体窒素が不要で、更に60mmシャーレーあるいはスライドガラスがセットできる広い透明冷却面となっています。

機種	設定温度	精度	標準価格
MC-10	室温から 0°C	$\pm 0.5^{\circ}\text{C}$	58万円
MC-100	室温から -25°C	$\pm 1^{\circ}\text{C}$	128万円

- 「冷却タイプ」「加温タイプ」のカタログのご請求は本社営業部へ。
- プレート形状、ガラス面への穴開け加工等御相談に応じます。

加温タイプ

マイクロウォーム・プレート®

(顕微鏡用透明加温板)

特許申請済



マイクロウォーム・プレートは、透明なガラス板の面全体が発熱体ですのでむらのない均一な表面温度を保ちます。(設定温度：室温 $\sim 50^{\circ}\text{C}$)精密定温下での培養状態観察に、又、細胞組織の電位測定等に活用されております。用途により多機種取り揃えております。

株式会社 北里サプライ

本社営業部 静岡県富士宮市三園平1429 〒418

TEL.(0544)27-8831 FAX.(0544)27-6060

東京出張所 TEL.(03)3903-7410

CORNING BETTER SURFACE PRODUCTS

コーティングの時間と
コンタミネーションの不安を解消

ファイブロネクションコート製品

コートNo.	規 格	塗装面積	個/パック	個/外面
25000FN	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	60
25010FN	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	40
25020FN	ディッシュ100φ	55cm ²	10	40

○ウシ血漿由来ファイブロネクション

コラーゲンコート製品

コートNo.	規 格	塗装面積	個/パック	個/外面
25000COLI	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010COLI	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020COLI	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810COLI	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820COLI	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860COLI	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100COLI	フラスコ 25cm ³	25cm ²	10	60

○ブタ臍由来酸可溶性TypeIコラーゲン

ゼラチンコート製品

コートNo.	規 格	塗装面積	個/パック	個/外面
25000GEL	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010GEL	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020GEL	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810GEL	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820GEL	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860GEL	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
* 25100GEL	フラスコ 25cm ³	25cm ²	10	60

○豚皮由来ゼラチン

ご使用に先立ちサンプルによる事前チェックをおすすめします。35φディッシュ、サンプルパックを用意しておりますのでご希望の方は本社又は下記支店へご連絡下さい。

岩城硝子株式会社

本社第3営業部 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 ☎03(214)6221(直)
 ●大阪支店 ☎06(362)6291(代) ●名古屋支店 ☎052(211)3855(代)
 ●九州支店 ☎092(451)5606(代) ●広島支店 ☎082(248)0293(代)
 ●札幌営業所 ☎011(221)3477(代)